

で最大、2-4泌乳期0.15で、一部有意でない相関係数が求められた。

(4) 初産次月令と4産までの乳量との関係

初産次月令を95%の信頼度でA(上限以上), B(信頼限界), C(下限以下)の3区に分けて、産次別の平均日令, 1と4産次の平均体重, 4泌乳期の合計乳量を示すと第3表のとおりで、B区の優位がみとめられた。

第3表 4産までの乳量

区	例数	月令				体重		乳量
		初産次	2	3	4	初産次	4	
A	8	35.6 ^{カ月}	48.6 ^{カ月}	65.0 ^{カ月}	83.1 ^{カ月}	509.13 ^{kg}	599.25 ^{kg}	23186.64 ^{kg}
B	8	29.6	42.5	57.3	72.8	495.63	588.38	21474.14
C	9	25.8	40.2	56.3	72.5	496.33	592.44	18544.43

第2表 各泌乳期間の乳量, 搾乳日数の相関係数

泌乳期	2	3	4
1	0.57** 0.48*	0.63** 0.41*	0.65** 0.25
2		0.71** 0.53**	0.54** 0.15
3			0.66** 0.48*

注. 上段は乳量, 下段は搾乳日数の相関係数を示す。
*, **はそれぞれ5%, 1%の有意水準を示す。

日本短角種の増体と肉質からみたと殺適期について

菊地 淳*・小野寺勉*・斉藤精三郎*・谷地 仁*・吉田宇八*・菅原休也*

1 ま え が き

日本短角種は黒毛和種と比較して、増体と粗飼料の利用性で優れており、肉質は劣っているといわれ、このため枝肉市場で枝肉格付が低く、安価な取引をされている現状である。このことは飼料を黒毛和種と同種のものを探食していることを考えれば不利益であり、このような現状で短角種の肥育経営を存続させていくためには、素牛生産費が安いことを留意し、肥育仕上げの技術、つまり、と殺適期をつかむことが大切と思われる。このと殺適期は増体、飼料要求率が落ち込む前であり、また、枝肉格付で「中」以上を得る肉質の時点と考え、この両方のかねあいからと殺適期を見出そうと検討した。

2 試 験 方 法

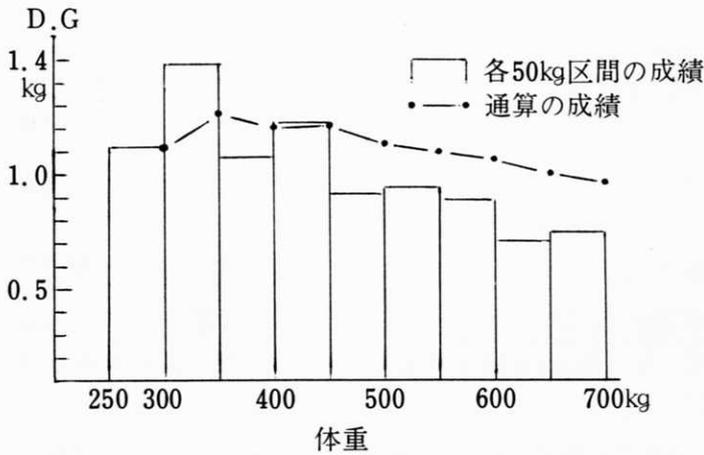
仕上げ体重の大型化試験、つまり日本短角種去勢牛

36頭を供試し、と殺目標体重600kg, 650kg, 700kg区とし、粗飼料をヘイキューブとサイレージ給与区に分け、粗飼料多給型肥育で行った試験を中心に取りまとめ、この他に当試験場で行った種々の短角種の肥育試験のデータを加味して検討した。

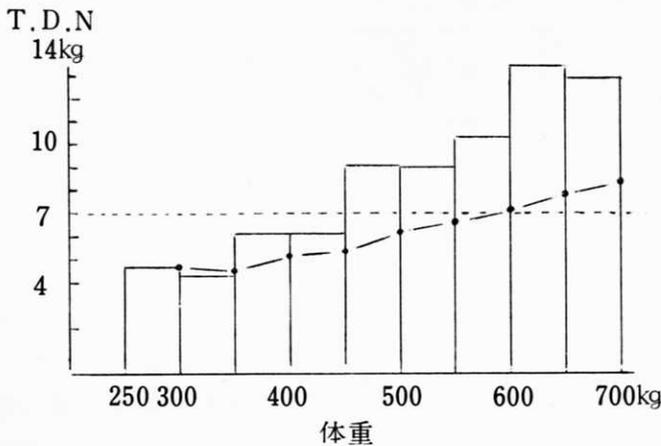
3 試 験 結 果

- 1 増体経過(第1図)
- 2 養分(TDN)要求率の経過(第2図)
- 3 体重, 日令と肉質の相関(第1表)
- 4 と殺体重別の肉質(第2表)
- 5 と殺月令別の肉質(第3表)
- 6 体重, 日令と枝肉分割の相関(第4表)

* Atsushi KIKUCHI, Tsutomu ONODERA, Seizaburo SAITO, Hitoshi YACHI, Uchichi YOSIDA, Kyuya SUGAWARA (岩手県畜産試験場)



第 1 図 増体経過



第 2 図 養分 (T.D.N) 要求率の経過

第 1 表 体重, 日令と肉質の相関

	日 令	枝肉歩留	脂肪交雑	脂肪含有
体重	*** 0.719	*** 0.667	* 0.275	*** 0.443
日令		*** 0.638	* 0.268	*** 0.399
交雑				*** 0.734

n = 70

第 2 表 と殺体重別の肉質

体重	頭数	枝肉歩留		脂肪交雑		脂肪含有率	
		平均	C.V	平均	C.V	平均	C.V
kg		%	%	%	%	%	%
500	7	61.0	1.8	0.63	54.1	6.1	29.1
550	17	61.8	2.2	0.61	47.2	6.8	24.5
600	24	62.3	2.2	0.97	48.3	10.4	28.9
650	10	64.0	2.3	0.81	45.2	9.4	16.0
700	7	64.9	2.0	1.11	50.4	10.7	19.9
750	5	65.1	1.9	1.16	36.9	10.9	15.4

注. 脂肪含有率とはロース芯である。

第 3 表 と殺月令別の肉質

月令	頭数	枝肉歩留		脂肪交雑		脂肪含有率	
		平均	C.V	平均	C.V	平均	C.V
カ月		%	%	%	%	%	%
19	18	61.4	2.0	0.67	51.2	6.4	29.5
21	6	61.0	2.1	0.65	49.4	9.1	36.4
23	21	62.3	2.1	0.89	45.6	9.5	24.5
25	17	64.3	1.9	1.05	52.4	10.9	24.5
27	8	64.9	2.0	0.89	47.9	9.6	20.6

第 4 表 体重, 日令と枝肉分割の相関

	赤肉量	脂肪量	赤肉率	脂肪率
体 重	n.s 0.395	*** 0.902	** -0.823	** 0.840
日 令	n.s 0.462	** 0.817	* -0.686	** 0.780

注. 体重 600kg 以上 n = 10

4 ま と め

1 増体成績と飼料要求率からと殺適期を見出せば D.G 1kg 以上, 1kg 増体当り T.D.N 量 7kg 以下の標準でみれば体重 550kg から 600kg の間と考えられる。飼養型態が濃厚飼料多給型であれば D.G, 飼料要求率とも当試験場より良くなるのが推察され, この場合のと殺適期は伸びて 600kg 近くになると考えられる。

2 と殺体重別の肉質からと殺適期を見出せばと殺体重 550kg までは枝肉格付が「並」であり, 体重 600kg になると格付は「中」になり, これ以上の体重でも「中」であったことから, と殺適期は体重 600kg と考えられる。また, と殺月令別の肉質からと殺適期を見出せば 19カ月令と殺では枝肉格付が「並」であり, 21カ月令になると脂肪交雑からの格付は「並」であり, 脂肪含有率からの格付は「中」であり, 総合判定で困るが, ここは人為(格付員判断)による変動係数の高い脂肪交雑はさけ, 全国同一値の出る(抽出性脂肪)脂肪含有率で判断して良いと思われる。23カ月令になると枝肉格付は「中」であり, これ以上の月令でも枝肉格付が「中」であったことから, 月令になると殺適期は 21 から 23カ月令と考えられる。

以上のことからと殺適期を整理すると, 23カ月令では体重にとられずに適期であり, 21カ月令でも体重が 600kg に近ければ適期, 21カ月以前でも体重が 600kg になっていればと殺適期と考えられる。

3 体重 600kg 以上になると赤肉量の増加は期待できず, 脂肪量だけが確実に増加することからでも体重 600kg 以上にするは無駄であろう。